



No. 127 2017.7

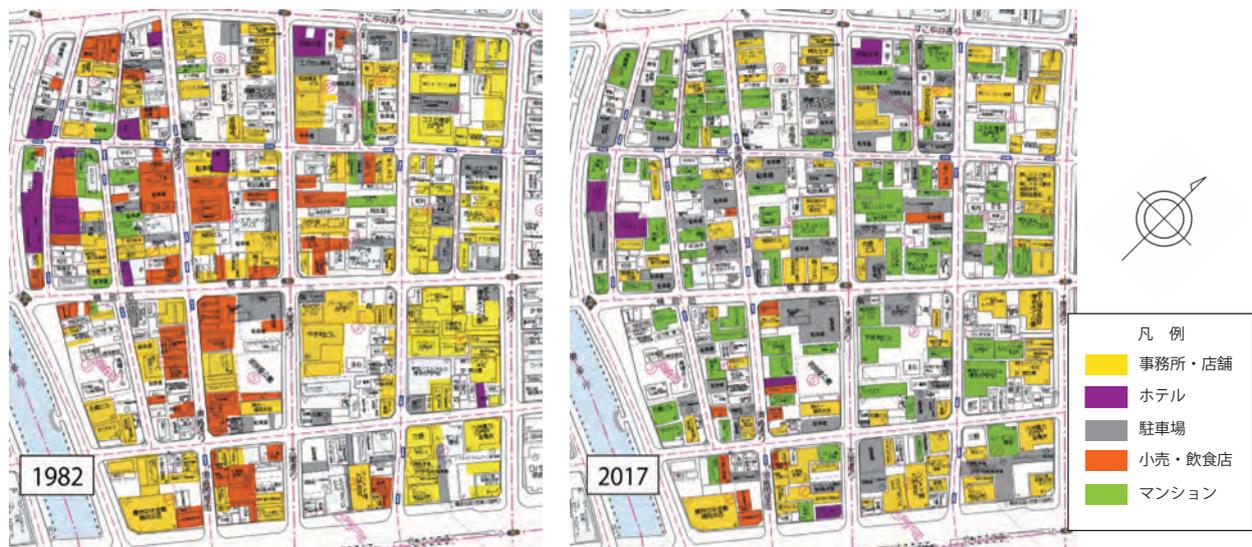
(株) よかネット

## NETWORK

吉川氏の熱き想いと粘り強い実行力による 村上市の町並み保存・再生の取り組み	2
昭和30年ごろの雪国の里山の、風景を取り戻したい -30年以上に及ぶ雪国植物園の取り組み-	5
「災害に強い美野島」に向けて 地区ビジョンの作成をお手伝い	8
四箇田団地のコミュニティスペース 地域とつくる安心拠点「しかたの茶の間」	10
第124回地域ゼミ 能古島 空き家を活用した移住・定住プロジェクト	12
第125回地域ゼミ 多久市ローカルシェアリングセンターの取り組み	14
<b>見・聞・食</b> 【特別寄稿】関西地域での竹活用の取組のご紹介	16
<b>近況</b> 里山十帖にて新しい価値観の贅沢を味わう	17
大木町の食材を使った料理教室で、 交流センターの意見交換	19
表紙解説	20

### ●都心居住で単身世帯が増える地域

弊社の事務所周辺で近年マンションが目立つので、古門戸町と須崎町での立地状況を調べてみました。1982年と比べるとマンションが非常に増えていることがわかります。そのほとんどがワンルームマンションです。歩いて天神に行ける立地の良さと地価の安さから、車を持たない学生・サラリーマンやお年寄りなどの単身者の需要にマッチしたようです。ただ、地元の人に話を聞くと、マンション住民と地域との関わりはほとんどないとのこと。一方、地元は山笠などの祭りを通じて“立ち話が多い”というほどコミュニティがしっかりしています。地元を離れても、山笠の役員などの関わりを持つ人も多いそうです。地域内に住んでいても地元と関わりがなく、地域外に住んでいても地元と関わっている。須崎町も古門戸町も人口は増えていますが、ただ人口が増えればいいものなのか？地域とは何か？と改めて考えさせられます。(20頁に表紙解説)



※ベース図面はセンリン住宅地図(2017)

## 吉川氏の熱き想いと粘り強い実行力による 村上市の町並み保存・再生の取組み

山田 龍雄

新潟県の最北端に位置する村上市は、江戸時代前期に入封した村上氏や堀氏などの村上城主によって築かれた城下町です。

市街地は、今でも城下町を構成する武家屋敷と町人屋敷が残っており、市街地面積は約2.2k㎡と狭く、町人屋敷だけをまち歩きをしても1～2時間程度で回れる広さです。

昨年の10月には、市街地の城下町や出羽街道、三国街道中通り、米沢街道などによって村上城下と密接につながっている宿場町、港町などを含めて10箇所が歴史風致地区に指定されています。また、村上市では江戸末期、村上藩の青砥武平治という方が世界で初めて鮭の回帰性に着目し、自然ふ化増殖システムを考案したことで有名です。

今回、村上市では鮭商品販売の老舗であるきっかわで働く高橋典子さんに主に外観再生をしている町屋や「春の庭百景めぐり」の見所である庭園などを案内していただきました。

その後、きっかわの社長で村上市の町並み保存・再生のリーダーである吉川真嗣さんに、18年に及ぶ町並み保存・再生のお話をお聞きすることができました。

18年に及ぶ町並み保存・再生活動の経過については、奥様の吉川美貴さんが執筆された「町屋と人形さまの町おこし(学芸出版社)」に詳しく説明されていますので、興味ある方は、是非、この本を読まれることをお勧めします。

### ●道路拡幅賛成 9割以上の中からのスタート

吉川氏は大学卒業後、商社に勤められていたのですが、実家の事情のため27歳の時に故郷の村上市に戻り、家業の鮭の製造加工業に専念されていました。6～7年後、村上市では近代化の名のもとに中心市街地での土地区画整理事業の話が持ち上がります。当時、関係者のほぼ100%が道路拡幅に賛成しており、多くの人が近代化を当然のことと受け止めていました。吉

川氏は、全国町並み保存連盟会長の五十嵐大祐氏から「村上の町並み保存・再生の大切さ」の教えと励ましの言葉を受け、反対の意を唱え、商店街の青年会を中心に反対署名活動をされました。しかしながら、この活動は3週間もしないうちに賛成派から潰されてしまいます。そこで、吉川氏は「署名活動により古い町を保存できても死んだような町が残っては意味がない。道路拡幅反対を唱えるのではなく、現在の町を活かし、活性化させることに力を注ぐことだ」と気づきます。ここから短期間で町の資源を活かしたプロジェクトを次々と仕掛けていきました。プロジェクトごとに物語があるのですが、ここではこれまでの保存・再生活動の概略を表1に示します。このプロジェクト以外に、町並み保存のシンポジウム、講演会などを多数、行っています。

このような町屋の資源を活かした賑わいづくりや活動が、日本ナショナルトラストによる観光資源保護調査にもつながり、市民や道路拡幅賛成の関係者の意識を変え、18年を経て、やっと行政も道路拡幅を断念し、晴れて村上市の町並みを活かした取組みが行政計画として認可されるに至っています。

表1 主な活動の経緯

H10年7月	村上町屋商人会の結成 手作りの加盟店マップ作成
H12年3月	第1回町屋の人形さま巡り開催 1カ月間で3万人を呼び込む
H13年9月	第1回町屋の屏風まつり開催
H14年2月	黒堀プロジェクトによる最初の 有志メンバーによる工事
H14年3月	十輪寺えんま堂の骨董市
H16年3月	町家の外観再生プロジェクト開始
H20年11月	黒堀通りの緑3倍計画開始
H25年	空家再生プロジェクト開始
H26年	空家再生と外観再生が合体し、 新たに「むらかみ町屋再生プロジェクト」発足
H27年5月	第1回春の庭百景めぐり
H29年5月	にいがた庭園街道プロジェクト

## 代表交代のごあいさつ

謹啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて私こと山田龍雄は、今般、平成二十九年五月（第三十六期）の株主総会において代表取締役社長を退任いたしました。

社長として二〇年間務めさせていただき、これまで永年に亘り、公私ともに格別のご懇情を賜りましたこと誠にありがとうございました。

今後は、主に営業面で会社経営を支援していく所存でございます

なお、後任には山辺眞一が就任しましたので、私同様にご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

先ずは略儀ながら、御礼かたがたご挨拶申し上げます。

敬具

前代表取締役社長 山田 龍雄

さて私こと山辺眞一は、今般、平成二十九年五月（第三十六期）の株主総会において代表取締役社長に就任いたしました。

今後とも社業の発展に努力していく所存でございますので、これまで同様、格別のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、下記の通り役員は選任されましたので併せて、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

敬具

平成二十九年六月吉日

株式会社 よかネット	
代表取締役社長	山辺 眞一
取締役（主席研究監）	山田 龍雄
取締役	馬場 正哲
監査役	駄田井 正

### ●行政に頼らない町づくり

吉川氏とその有志による一連の活動は、資金面で行政に頼らず、自己資金及び基金などを募り、行っています。当時の行政との関係もあったとは思いますが、この方針は徹底しています。

この行政に頼らない事例をご紹介します。

#### （町屋の人形さま巡り）

「町屋の人形さま巡り」では、実行委員会が工夫して35万円という低予算で実施されています。第2回目開催のときに行政から「いくら補助金がいりますか？」との要請があったのにも拘わらず、吉川氏は「活動費が行政からポンと入ってくるようになると最初のうちは有難いと思うようになるが、3～5回と続くと当たり前となり、今まで工夫してやってきた商人会のメンバーの意識が低下する」ということで、市の申し出を断っています。今では、行政には全国からの問い合わせの窓口やマップ資料の配布、インターネットのHPによるPR等の支援ということで役割分担をし、協働でイベントを盛り上げています。ちなみに「町屋の人形さま巡り」のヒントになったのは福岡県吉井町の「お雛様めぐり」だったそうです。

### （黒塀プロジェクト）

このプロジェクトは、平成14年に風情ある町並みを再生したいという思いから「黒塀一枚千円運動」という名目で、市民に呼びかけ「板一枚千円」の寄付を募り、行っています。

「黒塀プロジェクト」で実施した黒塀の裏側を見ると、ブロック塀に直接、板を張って、黒のペンキを塗っています。本物ではありません。しかし、風情ある通りを演出しています。

また、平成20年には、黒塀が続くだけではどうしても殺風景なところ、特にアイストップとなる場所にモクレンやモミジ等を植樹する緑化計画を企てています。これも行政に頼らない「緑1口千円運動」として行っています。

これは吉川氏が、プロジェクト立ち上げの1年前に取材された熊本県山鹿市の「瓦一枚千円運動」がヒントになっているそうです。

### （むらかみ町屋再生プロジェクト）

「町屋の人形さま巡り」、「町屋の屏風まつり」とソフト面では全国的に知られ、秀でたものになってきたのですが、景観というハード面では魅力に欠けているということから「町屋の外観再生プロジェクト」を仕掛けられます。



平成 14 年から続いている黒塀プロジェクト  
表 2 むらかみ町屋再生プロジェクトの概要

- 基金からの補助額（補助率 60%）  
 外観再生：80 万円（上限）  
 空家再生：100 万円（上限）
- 特典  
 瀬波温泉に安価に宿泊できる  
 一口につき 3,000 円分の商品 1 割引き券  
 会員証の発行と事業報告

これは全国から会員を募り、年間 1 千万円、10 年間で 1 億円の事業を行うという構想で、全国の村上ファンから資金を集めて事業化していくというプロジェクトです。

平成 16 年から始まった事業ですが、平成 28 年までに 34 軒（うち空家再生は 6 軒）が再生されています。また、継続する事業としているため、会員に特典を設けています。クラウドファンディングというものが流行る前に、同じような仕組みで取組んでおられ、非常に先進的です。

#### ●町並み再生への粘り強い説得力

町屋再生や黒塀再生を実施していくためにはまずは地権者・所有者から再生の承諾を得なくてはなりません、吉川氏は、数年をかけて一軒一軒粘り強く説得されています。

#### （お隣の酒店の外観再生事業）

村上市でも大きな酒店であり、既に再生済みの吉川氏の鮭店と軒を連ねると、この町屋の外観として大きなインパクトになると前々から思っておられました。そこで、この家の主人に再三、外観の再生をお願いしていましたが、永らく断られていました。そこで、吉川氏は、お隣の家族に集まってもらい「この家が変われば、町が変わる。町の方向として歴史の町づく



経費節減と工法を簡単にするため、ブロック塀に直接貼り付けている

りへと方向転換となる」と涙ながらに説得しましたが、その日は断られたそうです。しかし、さらに 5 日後に再チャレンジし、説得にいくと、吉川氏の熱意が伝わったのか、ついに再生の同意を得ることができたとのこと。なんと説得するまでに 5 年を費やしたというから、とんでもない粘り腰です。

#### （孫惣刃物鍛冶の空家再生事業）

町屋の再生だけでなく、職人町にも目を向けようということで、鍛冶屋をしていた親父さんが亡くなって以来、放置されていたものを再生したのが、この事業です。

これも再三、息子さんに鍛冶屋としての歴史を保存することをお願いに行くのですが、本人は「やるとも、やらないとも」言わなかったらしいのです。ある時、NHK のクローズアップ現在の空き家特集で「尾道の空き家バンク」の空き家再生で掃除から始めたケースがヒントになり、直ぐに「掃除から始めさせてください」とお願いに行ったそうです。「掃除だけであればよい」と許可をいただき、2 か月後に 5 ～ 6 人で掃除をし、仕事場を綺麗にし、親父さんの鍛冶職人としての記録を整理することができました。そして、その年の大嵐のときに壁が一部破損したことをきっかけに、内部を再生することの許可を得、改修を行ったといいます。まち歩きの際に、ここの鍛冶屋さんにお邪魔すると、ちょうど息子さんが出てこられて、嬉しそうに町屋の特徴、鍛冶職人の親父さんの自慢話をしてくれました。



5年かけて説得し、外観再生に至った吉川鮭店のお隣の酒店

町屋再生事業は一つひとつにエピソードがあり、それぞれ吉川氏の粘り強い説得があったものと思います。これだけでも、もう一つ本は書けるのではないかと思った次第です。

#### ●「にいがた庭園街道」～広域観光への展開

村上市内で開催していた2回目の百景巡りの今後の展開を考えているときに、新潟県内には、素晴らしい名刹と庭園があることに気づき、これを線で結びつけることを構想し、実現したのが、今年から始まっている「にいがた庭園街道」です。

吉川氏は、新潟県内の庭園や伝統建築は新潟県の西に連なる山々の裾野を走っており、ここには多くの温泉もわき出ていること、村上市を起点とする原風景が楽しめるラインであることに気づき、これを「にいがた庭園街道」と命名し、新たな広域観光を仕掛けています。

村上市の人形さま巡りから始まった運動は、今や新潟県の観光産業の一大イベントにまで発展していることに、驚きと称賛以外はありません。最後に吉川氏に「一時期、これだけ商店街の人から白い目で見られたら、普通なら気持ちも萎えるであろうし、奥様も普通ならば、町づくりの運動は止めてほしいというものですが、その辺は、どうだったのですか？」と聞いてみました。

吉川氏は、静かに「女房が一番の理解者であり、本当に心のうちを話せる相手が女房であった。それと二人一緒に町づくりで頑張っているところに行き、私より困難を乗り越え、頑張っ



掃除から始めて、所有者に納得してもらい鍛冶職人の仕事を保存

ている人を見ると、私などはまだまだ頑張らないとダメだと思う」と言われました。

吉川氏が言うように町づくりは「信念」と「実行」と誰もが頭では理解していると思いますが、ここまでできる人はなかなかいません。

村上市の町づくりをリードしてきた熱意と人を惹きつける吉川氏の魅力が、多くの賛同者を生み、行政に頼らない町づくりを成功に導いたのではないかと思った次第です。

(やまだ たつお)

#### 昭和30年ごろの雪国の里山の 風景を取り戻したい

-30年以上に及ぶ雪国植物園の取り組み-

本田 正明

5月中旬に会社の視察旅行で新潟県長岡市にある雪国植物園を訪れた。

「まちづくりを続ける」ことに興味があるのであれば、ぜひ話を聞いた方がいいと、村上市のきっかわの社長に紹介いただいた。「大原さんの話を伺うと背筋が伸びますよ」といわれたとおり、園長の大原さんは熱い思いの塊のような人だった。元々は雑貨卸会社の社長をしていたそうだ。経営者感覚をもって里山づくりや環境整備に取り組む人はめずらしい。

「生態系を残しただけでは人はこない。多くの人が心癒される美しい風景をつくる」というコンセプトで、里山づくりを始め、30年以上たった今でも、まだ道半ばという。実に息の長い取り組みを紹介したい。



左が園長の大原さん。右は園内をガイドをしていた  
いただいたタジマさん

●市民のボランティアで12年かけてオープン  
社長をしていたころから、まちづくりに興味  
があったんです。地域が元気でないと会社もよ  
くならないという思いがありました。興味を持  
つまちづくりのテーマは人によって様々だと思  
いますが、私の場合それが里山でした。

僕らの若かったころ、昭和30年代前半の懐  
かしい風景はどこにいったのか、1箇所ぐら  
い取り戻そうと市長を口説き落としました。民  
間ではいつか潰れてなくなるかもしれないの  
で、環境を守り続けるためにも公のものとし  
た方がいいと思って、35ha（11万坪）の土地を  
5億円で市に買ってもらいました。土地は元々  
ばらばらの民有地だったんですが、工業団地  
目的で買収されていました。ただ円高不況の影響  
で半分が放置されていました。それを市に買い  
取ってもらいました。

当初から市民の力、ボランティアによるまち  
づくりをテーマにしていました。ボランティア  
にも、お金を出すボランティア、知恵を出すボ  
ランティア、汗をかくボランティアの3つがあ  
ります。お金を出すボランティアは、つまり会  
員募集。一人1日8円寄付（年間3,000円）  
をお願いします、企業会員や永久会員なども募  
って1,700人の会員を集めました。知恵を出  
すボランティアは、大学教授に設計の相談に乗  
ってもらったりしました。もう一つ大事なのが汗  
をかくボランティア。実際に第2、第4日曜日に  
作業をしますが、やることは木を伐ることと道  
をつくることです。これを昭和60年からずっと



雪国植物園に一步入ると雑木林が広がる。新緑に癒  
される

続けて、植物園をオープンするまで12年かか  
りました。自然が相手だし、こちらは素人なの  
で、そんなにうまく進まない。田んぼと土木工  
事は市が行ってくれましたが、それは全体の  
20分の1。あとは自分たちの手でつくりまし  
た。

#### ●環境をつくれば、自然が戻ってくる

植物は新潟県以外のものは植えない。標高  
500m以下にある里山のものに限る。園芸品  
種は植えない。農薬は使わないというのがル  
ールです。そうするとトンボが40種類、鳥も  
年間80種類ぐらいくるし、カエル9種類、ホ  
タルもゲンジとヘイケを両方みることができ  
るようになる。環境をつくれば、養殖をせず  
とも自然が戻ってきます。

里山というのは生活のための山なので、手  
の加え方によって山の性質や植生も変わら  
ます。隣の山にあつて、こちらにないものな  
どもあります。そういうものを集めてきて、今  
では樹木が200種類、山野草が600種類、  
シダ類が50種類になっています。

#### ●オンリーワンを目指すと全国からくるように

現在は社団法人として市からの指定管理で運  
営していますが、将来は独立採算で運営するた  
めに、受益者負担の工夫をしないとイケませ  
ん。多くの方が喜んで入園料を払ってくれる  
条件は何かと考えると、心が癒される美し  
い風景です。生態系が残っているというだけ  
では、人は来てくれない。新潟県の生態系  
を守ると同時に美しい風景をつくらな  
いとイケません。

美しさとは何かというと、木をほどよく伐



クリンソウの群生は植えているそう。塔の先の「九輪」に似ていることから付いた名前だとか

て見通しがいいということが大事になります。見通しがよくないと安心できない。ほっとしない。花を咲かせるためにも木を切らないといけない。我々は光と風をテーマにそれをやり続けることが仕事です。

苦労もあります。途中で近くに400haの国営公園ができることは予想できなかった。市長に運営できなくなると抗議しにいったこともありますよ。そうしたら「国営公園は国民の余暇のための公園だが、雪国植物園は自然を守るための公園である。植物園は守るからやって欲しい」と言われて、続けることになりました。

国営公園と競争しては生き残れないので、オンリーワンを目指しています。家族連れは国営公園に行くことが多いですが、こちらにはむしろ、花や鳥が好きな人が多い。専門家なみに詳しい人も来ます。みどりの日に無料開放したら、東京、神奈川、千葉、鹿児島や仙台からも来ました。オンリーワンを目指すと全国からくるようになる。年間15,000人の来訪がありますが、その半分以上は関東などの県外からです。まだ整備中なのであまり告知はしていませんが、最近は口コミやネットなどの影響で急激に増えています。今年も昨年の25%増しぐらいになっています。

50歳から里山づくりをはじめて32年になりますが、まだ完成していません。敷地内はほとんど伐り終わりましたが、周辺の個人所有の土地がスギだらけのままです。伐らせてほしいとお願いして回っているのですが、後3年はかかる



ハナイカダ。水に浮かべると人が乗っているように見える。ガイドがないとわからないことばかり

思っています。

### ● やり始めたからには完遂させるのが経営者

以上が園長の大原さんに伺ったお話である。30分程度の短い時間だったが、30年の重みがある話だった。印象的だったのは、ただ里山を自然に回復を任せるだけではなく、新潟のシンボルである雪割草が自生する状態をつくるなど、美しい風景を演出するためのポイントを幾つかつくっていることだ。生態系を守るだけでなく、どうすれば人が来る魅力をつくれるかも考えられていた。

「やり始めたら絶対に完遂させるというのは経営者の感覚ですよ。投資をしておいて、途中でやめたら自分の人生がムダになってしまう」といわれるように、自分の人生をかけて取り組まれている。億を超える個人資産も投資しているそうで、その覚悟と気迫は82歳のものとはとても思えなかった。今でも毎日山にいて、夕食のときだけ自宅に帰るのだそうだ。言っていることと行動が常に一緒なのだ。

「言葉で言っても誰もついてきませんよ。いつも山に入り、それをみて、もしかしたらできるかもしれないと思わせないとついてこない。そこまで持っていけないといけない」

目の前に広がる里山がその結果を静かに物語っていた。まちづくりや地域づくりに関わるものとして、活動に取り組む際の大事な心構えを学ばせてもらった視察だった。

(ほんだ まさあき)

「災害に強い美野島」に向けて  
地区ビジョンの作成をお手伝い

山崎 裕行

弊社では昨年度、福岡市から委託を受けて、「校区ビジョンづくり」をお手伝いしました。よかネット No124 では校区ビジョンの概要を、No126 では中央区高宮校区におけるビジョンについてご紹介したところです。

今回は、昨年度にお手伝いしたもう1つの地区である博多区美野島地区の取組み経過と内容をご紹介します。

● 平常時の取組みが災害時に生きる

「災害時の体制の充実を図るためには、基盤となる平常時の連携と協力体制の構築が重要である」との認識のもと、ビジョンづくりで最初に行ったのが自治会長、社会福祉協議会、民生委員・児童委員、防災委員会といった災害時に中心的な役割を担う人、組織を対象にしたヒアリングでした。

ヒアリングでは、美野島地区のこれまでの防災・減災に関する取組みの状況や、平常時の取組の悩み、課題などについて意見を出してもらいました。

表2は、災害時に、地域住民がまず集まることになっている地区集合場所に関するヒアリング結果概要を示したものです。美野島地区では、先に見たように地区集合場所が載っている防災マップの作成・配布や災害時要援護者（避難行動要支援者）の支援に向けたワークショップの開催、あるいは防災訓練を定期的に行っています。しかし、ここにもあるように、周知・理解の不足を指摘する声がありました。

地域活動への参加者の減少や、防災・減災に対する意識の差、役員交代時の引継ぎの在り方など、その要因はいくつかあると思います。あらゆる手段、機会を捉えて周知を図っていくことが重要であるし、周知・理解のための情報の出し方も工夫のしどころがあるように思います。例えば、「子どもの言うことならば聞く」ということがあるので、小学生や中学生に協力してもらい、地区集合場所のことや、安否確認

表1 美野島地区自主防災組織の主な活動  
(平成26・27年度)

	活動内容
平成26年度	・防災研修会
	・防災マップの作成
	・災害時要援護者支援についての説明会
	・災害時要援護者支援計画書に関する説明会
平成27年度	・災害時要援護者避難支援訓練
	・要援護者支援ワークショップ
	・災害時の人権と避難所HUG訓練

表2 地区集合場所に関するヒアリング結果の概要

項目	概要
周知	・各自治会とも住民の1～2割程度しか知らない
体制	・震度5弱以上で立ち上がるのは各町内で共通で、救護係等の体制のひな型はあり、各町内ではそれぞれ役員が担っている ・役員が各係を担っているものの、その役割まで理解しているかどうかは疑問である
集合	・民生委員・児童委員も各集合場所に集合することになっている ・目印の旗は各町内で1本あり、防災委員が持っていくことになっている（防災委員がいない場合は、公園の倉庫等から代わりの人が準備） ・地域住民に集合してもらうには、声掛けをしないといけないだろう
安否確認	・困っている人を発見しやすいように、無事であれば白いタオルやハンカチを軒先に掲げてもらうようにしているが、周知徹底されていない

の方法を地域住民に伝えてもらうなどが考えられます。多世代交流+防災・減災力の向上です。

次に行ったのが、計2回の座談会（ワークショップ）です。座談会は、自治会長や防災委員を対象とし、ヒアリングでいただいた意見を自治会別に整理したものを準備して、災害時に地区集合場所や避難所で、誰が、どのようなことをしたらよいか、また、平常時から備えておくことなどについて話し合ってもらいました。

このように、お互いに確認することで、例えば、「マジックペンを準備しておこう」や「ガムテープは、名札にも、伝言メモにも使えるな」といった事前の備えにつながりますし、「地区集合場所から避難所に移動するタイミングはどうしたらよいか」や「世代に応じた周知方法（回覧、SNSなど）を考える必要がある」といった課題の発見にもつながります。

表3 地区集合場所運営マニュアルに記載の項目

項目	取り組み概要
運営体制を整える	・集合場所の目印となる旗を出す ・リーダーを決める
被害状況を確認	・建物等の倒壊や火災が発生していないか確認する
安否を確認	・家族の安否を確認する ・隣近所の安否を確認する
要配慮者の避難	・要配慮者の避難状況を確認する ・要配慮者の避難を支援する
公民館に連絡	・各取り組みの結果を公民館に連絡する
避難所へ誘導	・避難所の開設状況から避難所への移動を判断する

●誰もがリーダーになれるように

美野島地区では、震度5弱以上の地震が発生した場合は、地区集合場所に集合し、住民の安否確認や要援護者の支援状況を確認することになっています。

地区集合場所の運営は、地区隊長である自治会長、防災委員、民生委員・児童委員などが中心で行うことになっていますが、自治会長をはじめとする役員が不在の場合も想定されます。

そのため、地区から誰もが地区隊長として活動できるように運営マニュアルを作れないかとの打診がありました。運営マニュアルの必要性は、座談会の意見でもありました。

では、どのようなマニュアルを作るか。作成に当たり地域側からの条件は、①最低限これだけはやってほしいことが書かれていること、②内容の見直しにより差し替えもしやすいものであることでした。

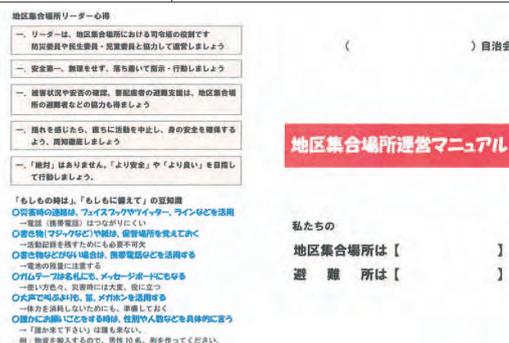
そこで、ヒアリングや座談会の結果、また、過去の災害時の教訓などを踏まえ、A4版の裏表で作成しました。あまり色々詰め込んでも見てもらえません。全6項目17の取り組みがチェック欄付で記載されており、どの取り組みができたか分かるようにしました。

また「リーダーの心得」や「豆知識」を記載し、注意・配慮事項が分かるようにしています。

この運営マニュアルは、条件②もあって、出来上がりにも少しこだわってみました。災害時、あるいは訓練の時に、天気が良いとは限りません。せつかくのマニュアルが雨で濡れて使い物にならなかつたら意味がありません。そこ

表4 初動期における地区対策本部運営マニュアルに記載の項目

項目	取り組み概要
地区対策本部の立ち上げ	・公民館に地区対策本部を立ち上げる
地区対策本部の役割	・地区集合場所のリーダー、市、区役所からの情報収集 ・地区集合場所のリーダー、市、区役所への情報提供
地区対策本部の移行	・避難所が開設された場合には、そちらに移行する ・公民館は避難行動要配慮者を中心とした避難所として運営



地区集合場所運営マニュアル表紙・裏表紙

で、紙質は、折り曲げや水に強いものを選びました。また、マニュアルは一度作成したら終わりではなく、適宜、見直しするものです。そこで、差し替えしやすいように透明のクリアケースに入れることにしました。

●地区対策本部のスムーズな立ち上げに向けて

もう1つマニュアル的なものとして、初動期（避難所が開設されるまで）における地区対策本部運営マニュアルを作成しました。

美野島地区では、避難所となる場所が公民館と、住吉小・中学校の2箇所あります。

平日はさておき、休日・夜間に災害が起きた場合、公民館は主事や館長などによって速やかに避難所開設となりますが、住吉小・中学校は、直ぐに開設というわけにはいきません。そのため、地区対策本部はまずは公民館で立ち上げ、その後、住吉小・中学校に避難所が開設された場合は、そちらに移行することになります。

マニュアルは、移行までの間に地区対策本部として取り組むことをまとめてほしいという要望に応じて作成しました。マニュアルと言っても、手順を示すのではなく、何をしなければならないかを明記したものとしました。こちらもA4の裏表となっています。

● 災害に強い美野島に向けて

今回作成したマニュアルは、防災訓練等で実際に使用してみて、適宜、改善していくことになっています。

美野島地区では今後、大規模災害に備えて地区内の企業等との連携や、避難所運営訓練、避難所運営マニュアルづくりに取り組むことで、「災害に強い美野島」の充実を図っていきます。

今回作成した地区ビジョンやマニュアル、またヒアリングや座談会の結果が、地域に根付き、活用してもらえるものとなることを願っています。  
(やまさき ひろゆき)

四箇田団地のコミュニティスペース  
地域とつくる安心拠点  
「しかたの茶の間」

山田 龍雄

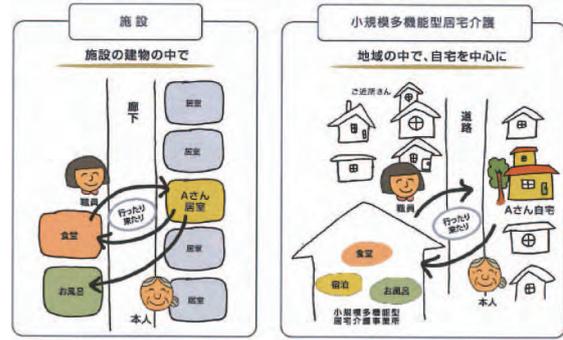
4月初旬、知り合いの設計事務所の方から、「四箇田団地におしゃれなコミュニティスペースができてから、一緒に見学に行きませんか？」とお誘いを受けました。誰が運営されているのかを尋ねると、「早良区入部で小規模多機能施設を運営しているNPO法人なごみの家（以下なごみの家）」とのこと。

「なごみの家」は、3年前に取材をさせていただいた福祉施設です。「なごみの家」が、どうして四箇田団地にコミュニティスペースを作ることになったのかが知りたくなり、4月末に見学させていただきました。

「なごみの家」のことについては、「よかネット（2014.4）」に掲載しています。改めて「なごみの家」のことを簡単に紹介します。

小規模多機能施設とは、一般に住み慣れた地域で「通い（デイサービス）」を中心に「訪問介護」、「泊まり（ショートステイ）」の3つのサービスを一体となっていく施設です。

この施設を立ち上げられたのが、現在、代表を務められている篠木珠枝（しのきたまえ）さんです。篠木さんは、長年の看護婦、療養型病棟のご経験から、高齢者にとってより良い介護サービス事業を手掛けたいとの思いを抱き、平成18年度に65歳で起業したという方です。



小規模多機能施設のイメージ



なごみの家の四箇田団地問題解決の提案  
(資料：NPO法人「なごみの家」サテライト事業の説明資料より抜粋)

創業のときより補助金には一切頼らず、私的資金と不足分は借入れを起こし、建てたばかりの自宅をそのまま小規模多機能施設として活用されました。

篠木さんと旦那さんは近くのアパート暮らしからのスタートだったそうです。小規模多機能施設では、原則、住み慣れた地域での高齢者（概ね中学校区単位）をサービスすることとなっていますが、実際は家庭等の事情があり、住んでいる地域に適切な施設がない場合は、逆に施設近くに移り住んでサービスを受けているようです。「なごみの家」では、高齢でアパート契約が出来ない方々に対して、「なごみの家」が代理で契約したり、2～3人の高齢者がルームシェアする形で居住していただき、24時間の介護サービスを行っています。

現在の利用者は28人（サテライトの小規模多機能も含む）であり、約18人の利用者が、元々この地域に住んでいない人とのことです。

3年前に取材させていただいた時には、小規模多機能施設は37箇所でしたが、現在45箇所（H29.5.1）と3年間で8箇所しか増えていません。高齢者が増えている割に施設が増えて



空き店舗を活用した「しかたの茶の間」

いないのは、24時間対応というサービス形態もあり、事業的には厳しい施設であろうかと想像されます。

#### ●四箇田団地における都市型の過疎化問題

四箇田団地は、UR（都市再生機構、旧日本住宅公団）が昭和40年代後半から開発を始め、51年にオープンした大規模団地（55棟の高層の分譲と賃貸の混合団地）です。開設した当初は、交通の便も悪く、入居状態が芳しくありませんでしたが、一般道路の整備、地下鉄七隈線の開通、都市高速道路の環状線開通などもあいまって入居者も増えてきたようです。

しかしながら、最近では四箇田団地も少子高齢化、子どもたちが戻ってこないという中山間地の過疎地域と同じような問題を抱え、平成8年に5,287人居たのが、平成28年には3,304人と20年間で約38%減少、高齢化率は7%から約32%と4倍強となっています。

#### ●小規模多機能施設サテライトとの併設の「しかた茶の間」

四箇田団地の少子高齢化問題の解決と地元の要望もあり、空き店舗のスペースを活用し、「なごみの家」と「コミュニティスペース」を併設した施設を平成28年6月にオープンされました。福岡市では初めての小規模多機能施設のサテライト版だそうです。

この施設を事業化するにあたっては、篠木さんは手続き等が面倒とのことで、補助金を申請されず、すべて自力で行っています。まさに75歳から新たな借金を抱えての起業というこ



天井は木を活用し、おしゃれなコミュニティスペース。奥がキッチンとなっている

とであり、改めて篠木さんの覚悟、凄さを感じます。「しかたの茶の間」は、入口部分が全面ガラスであり、モダンなデザインのたまり場空間です。

当初、あまりにおしゃれすぎて高齢者が入りづらい時期もあったようですが、今では毎週木曜日の音楽教室、第2、4月曜日が折り紙教室、第3金曜がちぎり絵教室などの定番コースのほか、不定期ですが四箇田校区食生活改善推進員協議会主催のランチ会などが行われており、新たな繋がりが生まれています。

折り紙教室やちぎり絵教室は、「しかたの茶の間」にいられていた高齢者の方に講師をお願いし、行っています。これも篠木さんの人材発掘と仕掛けづくりが長けていたことにあるようです。

小規模多機能施設サテライト「なごみの家しかた」も見せていただきましたが、非常にコンパクトにできており、デイサービス、ショートステイのスペースが整った施設でした。デイサービスなども併設している「コミュニティ施設」と兼用して利用できる点では、併設することのメリットがあると思われます。

#### ●空き家・空き店舗を活用した「たまり場」づくりがもっとできないか

小生が住む香陵校区では都市高速道がアイランドに延伸するため、校区の一部に都市高速道がかかることとなり、高架下を有効に活用できないかと一昨年から住民の方々とワークショップなどをして検討しています。ワークショップ

での意見で一番要望の高かった施設が「コミュニティスペース-たまり場」でした。公民館では前もって部屋利用の届けを出さなくてはならず、ふらっと入るには少々敷居が高い施設です。ふらっと入ってお茶（たまにはお酒）が飲み、地域の人たちと談話できるスペースは、一番の希望のようでした。

また、一昨年、国土交通省のモデル事業（既存住宅団地流動化促進事業）で調査した久留米市の青峰団地（戸建てと市営・県営・公社賃貸の混合団地）で地域の役員さんなどにヒアリングすると、やはり「たまり場」の要望が高く、地域で求められている施設として公民館とは違う形態の交流の場が求められているようです。

地域のコミュニティが希薄化、高齢者や若者などの引きこもり問題などの実情を考えると、今後、コミュニティスペース（たまり場）づくりは、地域の新たな絆づくりに必要不可欠のような気がします。このような集いの場のニーズは、益々増えそうな気がします。

その手段として増加し続ける空き家や商店街の空き店舗の活用は有効であり、このような活用の手伝いの機会があれば、是非、取り組んでみたいものです。（やまだ たつお）

第124回地域ゼミ

能古島 空き家を活用した  
移住・定住プロジェクト

櫻井 恵介

第124回の地域ゼミでは、久しぶりの空き家シリーズとして、atelier HUGEの水谷元氏（能古島みらいづくり協議会 副会長）をお迎えして、「能古島 空き家を活用した移住・定住プロジェクト」と題してお話頂きました。

当日は、多方面からご来場いただき満員御礼、講演後のディスカッションも大盛り上がりでした。本記事では、当日、水谷氏にお話しいただいた内容から一部をご紹介します。

●能古島みらいづくり協議会の取り組み

現在、能古島で人口減少・空き家増加の対策を行っている能古島みらいづくり協議会は、2011年に発足されました。

能古島の小学校、中学校は「海っ子山っ子スクール（小規模校特別転入学制度）」の対象校となっています。制度開始以降、島外からの児童数は増え続け、現在では半分以上の児童が島外からの通学となっています。

島の小学校にも関わらず、島の子どもたちの人数がどんどん減っている状況に対して、島の郵便局長が問題意識を抱き、少子高齢化に対する危機感を持ったことがきっかけで、能古島みらいづくり協議会が発足、空き家を活用した移住者支援に取り組むようになったそうです。

能古島みらいづくり協議会が行っている移住・定住の取り組みとして、「のこのもんステップアップツアー（現在は募集中止、賃貸可能な物件が案内できない為）」があります。

移住希望者に対して、島での暮らしを知ってもらうことを目的としたツアーで、スケジュールは次のような構成となっています。

- ①9:30～ 集合・自己紹介
  - ・参加者と地元住民による自己紹介&ワールドカフェ（能古島公民館）
- ②12:00～ 昼食・能古博物館見学
  - ・天気が良ければ昼食は博物館の敷地内にブルーシートを敷いてお弁当
- ③13:00～ 島歩き
  - ・西町→北浦周回、実際に島の集落を歩いて、島の暮らしに想像を巡らせてもらう

平均してWEBで月2件程度問い合わせがあり、これまでに延べ20組ほどが参加されているそうです。参加者の居住地は福岡市内在住者が最も多いものの、海外からの参加希望もいるそうです。

こうしてツアーに参加した移住希望者については、島の暮らしに馴染んでいけるかを鑑みて、役員会にて協議して最終的な移住の決定をしているそうです。

このようなツアーを実施する趣旨としては、理想と現実のギャップを埋めることがあります。島では都会と違って、気の合う仲間だけでは暮らすことができないことを認識してもらい、次のようなことを知ってもらうこととして開催されています。



能古小学校の児童数の推移 (能古小学校 HP より)

- ①自治会の説明をすることで、島での活動を知ってもらう
- ②他の移住者の体験談を聞くことで、島へ移住する暮らしを知ってもらう
- ③島の人と対話をすることで、お互いの人となりを知ってもらう

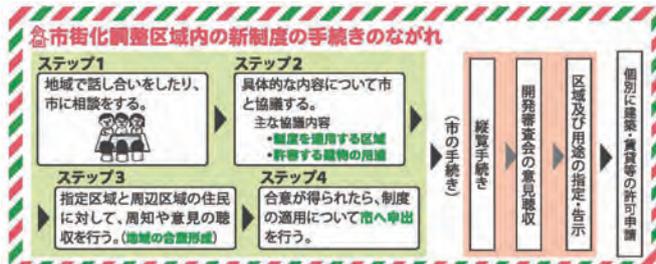
●島に移住してくるの魅力

能古島に移住してくる魅力としては、市街地に近いこと（渡船で10分で姪浜港、そこから30分以内で天神・博多にも行ける）、海と山、両方がある豊かな自然環境があります。

そしてもう一つが、少人数制(学年1クラス、14人程度)の教育環境にあるとのことでした。豊かな自然に囲まれた環境で、少人数で学ぶことで、子どもの性格が変わり、結果として親の性格も変わることにつながることもあるそうです。その一方で、子どもたちが変わる場所としての期待が強すぎる場合もあり、結果として、教育環境に対する魅力だけに捉われ、島とのつながり、島での暮らしに対しては全く興味のない移住希望者が来る場合もあるそうです。

このもんステップアップツアーでマッチングを行い、移住候補者が決まると、次は実際に入居するための空き物件を探すこととなりますのですが、地権者は家に対する思い入れが強く、家財道具や盆正月に帰ってくるのが理由で、物件探しが難航することも多いようです。

そういった中で、空き家を貸してもらうために重要となってくることは、極力、地権者の負担が小さくなるようにすることだそうです。一度貸してしまうと戻ってこないのではないかと不安もあるようで、そういった場合には、定期借家契約で3～5年程度の契約期間とする場合もあるそうです。また一方で、家賃収入を



区域指定制度の手続きの流れ (福岡市「市街化調整区域で住むこと 新装版」リーフレット引用)

そこまで期待しない地権者も多いそうで、家の改修費を移住者がいったん負担したうえで、家賃と相殺しているケースもあるそうです。

さらに、移住にあたっての手続きや入居前の家の掃除等については、声掛けをして人手を集めて地域で協力しているとのことでした。

これまでの、このもんステップアップツアーの実績としては、平成26年以降で6世帯が移住しているそうです。

●市街化調整区域で住むこと

福岡市では市街化調整区域の建築規制を段階的に緩和しており、2014年9月には既存集落内の空き家の賃貸化が認められました。これは地域住民で構成された組織（自治協議会または地域まちづくり協議会等）が「既存住宅賃貸化実施計画」を作成し、空き家所有者が賃貸住宅への用途変更の申請等（開発審査会への附議）の手続きをしなければなりません。これまで能古島はこの制度を利用し、移住者を空き家に受け入れています。

2015年8月には一定の条件のもとに設定した区域内（定住促進地域）で①事務所や日用品販売店舗、食堂やサービス業などの兼用住宅、②空き家の貸店舗化も認められるようになりました。（都市計画法第12号に基づく区域指定型制度）現在、能古島においては、この制度による区域指定を検討中とのことです。

●「まち住区」の可能性

水谷氏によると、単に住宅のみの要件を緩和しても、地域コミュニティ・集落の活性化という視点では不十分であるとのことでした。地域の活性化を考えるにあたっては、「まち住区」の考え方が重要であるとのことです。

その1つ目として、住むだけではなく「町家

型」の職住近接の考え方があります。ただ住むだけの場になってしまうと、郊外のニュータウンと同じようになり、結果として活性化にはつながらないのではないかとのことでした。

また、2つ目として、人口減少等に伴い、集落における既存産業が衰退している中で、地域経済活動のあり方を考えなければいけない、そこに対してバックアップをできる人の存在が重要であるそうです。

さらに、日常的な買い物ができるような商店やコミュニティの充実を図れるような飲食店が必要であること。そして、時代に合わせた産業従事者への対応として、能古島に住んでも働くことができる、そういったイメージづくりが大切であるとのことでした。

### ● 区域指定型緩和制度の課題

先に述べた区域指定型緩和制度の活用により、市街化調整区域内の既存集落の活性化が期待できるのですが、反面課題もまだ多いそうです。

一つ目は、制度利用における手続きの難しさがあるとのことでした。制度適用にあたっては、地域が主体的に取り組んでいくこととなっています。しかしこの手続きは都市計画コンサルタントなどの専門家の力が必要であるにもかかわらず、アドバイスできるコンサルタントの派遣制度がないことが課題であると感じているそうです。

二つ目の課題としては、自治会主導となることの懸念でした。地域の全体に関係することにもかかわらず、自治会のみで進められる可能性が非常に高く、地域への周知や理解が深まらないのではないかとのことです。

区域指定については、地域の合意形成が図られることが必要となります。現在区域指定を検討している能古島でも、合意形成をいかに図っていくかということが検討課題であり、その対策として、まずは小範囲から進め、徐々に同心円状に広げていくこと、また様子を見ながら定期的にアンケートを実施するなど、地元の気持ちにペースを合わせながら進めているそうです。

### ● 空き家をつくらない地域文化づくり

水谷氏は、最後のまとめの中で、30年後にさらに空き家が増える可能性を指摘されています。その対策として「“空き家をつくらない”という地域文化の育成」と「危機感と前向きな議論とのバランス」の2つのポイントを挙げられました。

私の住む周船寺も、駅裏は市街化調整区域に指定されています。表側では九大移転に伴う学生向け賃貸やファミリー向け分譲の建設が今も進む一方で、裏側には田畑と昔ながらの集落が広がっています。一見変わらぬように見える風景でも、集落内にはポツポツと空き家が増えていくように感じます。また、市街化区域でも住宅需要が下がってきたときには空き家が増えていく可能性は当然あります。能古島とは立地も環境も異なる地域ですが、そういった中で地域をコーディネートしていく最先端の事例として、他人事ではなく、興味深くお話を聞かせていただきました。

(さくらい けいすけ)

#### 第125回地域ゼミ

### 多久市ローカルシェアリングセンターの取り組み 原 啓介

NPO 法人価値創造プラットフォームの石崎方規さんと矢野億子さんに、よかネット124号でもご紹介した多久市ローカルシェアリングセンター（以降LSC）の取り組みについてお話していただいた。

多久市LSCは、子育て中の主婦や母子・父子家庭の方、介護など様々な理由で家を離れられない方を対象として、パソコンのPCスキル等の人材育成、クラウドワークスからのライティング等の大口での業務受注と、ワーカーの方々への分配・検品、託児サービスなど、子どものそばで働くことができる環境を一体的に提供している。

この発想は、そもそも矢野さんご自身が母子家庭のため、子育てと仕事を両立できる職場がなく、求職活動で大変苦勞されたという経験

## 行政サービス別のシェアサービス

行政サービス	解決したい課題	シェアリングサービス例
1. 雇用創出	若者、女性に向けた地域での新しい仕事づくり	・クラウドワークス（クラウドソーシング） ・ランサーズ（クラウドソーシング） ・ココナラ（知識・スキル・経験を500円で売買）
2. 男女共同参画	女性が働きやすい環境づくり	・エニタイムズ（日常のスキルシェア） ・タスカジ（家事代行 / 家政婦マッチング）
3. 社会福祉	子育てしやすい環境づくり	・アズママ（送迎・託児の安心頼り合い） ・キッズライン（ベビーシッターマッチング）
4. 公共交通	過疎地域での代替公共交通手段 観光客向けの新たな移動手段	・Uber（配車アプリ） ・notteco（長距離ライドシェア） ・COGICOGI（シェアサイクル）
5. 観光振興	宿泊施設需要の取り込みによる観光業の活性化	・airbnb（民泊） ・スペースマーケット（民泊） ・homeaway（民泊）
	観光ガイド、観光体験プログラムによる観光業の活性化	・tabica（着地型日帰り観光体験） ・Huber（訪日外国人旅行者向けガイドマッチング） ・tadaku（外国人が教える家庭料理教室）
6. 公的不動産活用	自治体が保有する低未利用施設の利活用による稼ぐ公共施設への転換	・スペースマーケット（有休スペースのシェア） ・軒先（有休スペースや駐車場の一時シェア）
7. 民間資産活用	空き家、空き店舗、空きビル等の利活用による民間不動産の活性化	・トメレタ（シェア駐車場）
8. 教育	生涯教育	・ストリートアカデミー（学びのマーケットプレイス）

と、自宅でパソコン教室を開業するなどインターネットに詳しいというバックボーンから生まれたアイデアだったそうである。矢野さんのアイデアを石崎さんが資料としてまとめ、商店街支援のために通っていた多久市に持ち込んだところ、多久市の商工観光係長（女性）の共感を得て実現した。

これまで約1年事業を展開し、ディレクター（クラウドワークスから業務を受注・分配・検品し納品）を多久市で2名雇用し、37人のワーカーを育成。そのうち22名が現在も継続して定期的に業務を受注している。なお、この事業においては、ワーカーの方々の満足度調査や、多久市としての今後のシェアリングエコノミーの方向性提案など一部を弊社でお手伝いさせていただいていた。

また、多久市LSCでは、シェアリングエコノミーのサービスを提供する各社を招いたセミナーを定期的で開催している。内閣官房によると、シェアリングエコノミーとは、「個人等が保有する活用可能な資産等（スキルや時間等の無形のものを含む）を、インターネット上のマッチングプラットフォームを介して他の個人等も利用可能とする経済活性化活動」であり、空き部屋、会議室、駐車場や衣服のシェア、家事代

行、育児代行、イラスト作成のマッチングなど多様なサービスが登場しつつあり、一億総活躍社会の実現や地方創生の実現など、超少子高齢社会を迎える我が国の諸課題の解決に資することが期待されている。このような国の方針を受け、多久市は、雇用創出や観光振興において、シェアリングエコノミーを積極的に活用する方向を明言している。

こうした活動が評価され、石崎さんは内閣官房から「シェアリングエコノミー伝道師」（第一弾・全国で5名）を拝命され、地方におけるシェアリングエコノミーの普及にさらに尽力されている。

「遊休施設を活用したスペースを自治体にて確保・リノベーションし、キッズスペース併設のワーキングスペース&コミュニティスペースをつくりたい」「活用されていないスペースや施設の有効利用を図りたい」「地元の人材が持っているスキルを広く公開し、活躍の場を広げたい」など、身近な資源を有効に活用すること、負担となる公共サービスの一部を民間経済によって補うことに関心がある方は、ぜひ、NPO 価値創造プラットフォーム石崎さんに相談されてみるといいかもしれません。

（はら けいすけ）

【特別寄稿】

関西地域での竹活用の取組のご紹介

(株) 地域計画建築研究所 (アルパック) 大阪事務所  
 サスティナビリティマネジメントグループ  
 中川 貴美子

今回、弊社のネットワーク会社である(株)地域計画建築研究所(アルパック)サスティナビリティマネジメントグループより、関西地域における竹活用の取組について記事を寄稿いただきましたのでご紹介します。

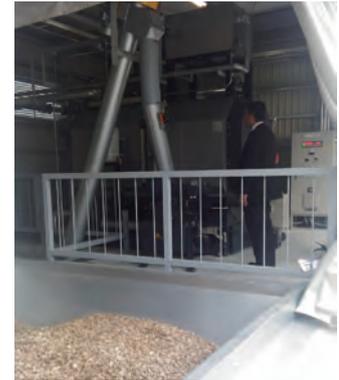
●国内初、竹チップバイオマスボイラーが本格稼働を開始しました

兵庫県洲本市“ウェルネスパーク五色ゆ〜ゆ〜ファイブ”に竹チップの燃料を主とするバイオマスボイラーが導入(設計施工:(株)ヒラカワ)され、4月5日に竣工式が行われました。当社は、基本設計および設計施工業者を決定するためのプロポーザル実施・審査支援、技術監理支援を行いました。

兵庫県洲本市は淡路島のほぼ中央に位置します。洲本市では、平成26年4月に策定(平成26年11月よりバイオマス産業都市として認定)した「洲本市バイオマス産業都市構想」の中で、5つの事業化プロジェクトを掲げており、その一つである「竹資源の有効利用事業」の一環として、バイオマスボイラーが導入されました。

近年、温浴施設等の熱需要、ガス消費のある施設のボイラー更新時期に、木質バイオマスボイラーに転換する例がありますが、「竹」を主として本格的にボイラーとして活用する今回の設備は、おそらく全国初の導入となります。

洲本市に限らず、各地の竹林は、筍生産、竹炭や建材等に活用される循環システムのひとつでしたが、時代の流れにより放置竹林が増え、有害鳥獣のすみかとなっていることから、経済的に活用できる仕組みをつくるのが全国的に、急務の課題となっています。これまで、竹を燃焼すると、ガラス状の灰が固着(クリンカの発生)することが技術的な課題でしたが、連続燃焼試験をメーカーと協力し、クリンカの発



竹チップとバイオマスボイラー

生しにくい竹の燃焼方法を確立、今回の実用化につながりました。計画では、竹林面積4~5haに相当する年間140~180トンの竹チップを使用する予定です。また、本ボイラーは、災害時の停電時にもお湯を供給できるようなシステムとなっています。

竹に限らず、バイオマス活用においては、燃料を計画的に調達できるか、また調達可能な燃料とバイオマスボイラーの相性が確認できているかもポイントとなります。今回は、市内で調達可能なチップ(竹以外も含め)を提示し、品質や形状等を提案者には確認いただき、どのチップであれば活用できるか、またその時のインシヤルおよびランニングコストがどうなるかについても提案・評価を行い、事業者の選定を行いました。

バイオマス利用は化石燃料ボイラーとは異なり、導入してから約1年間はモニタリングし、使い手も使いこなしていく必要があります。まずは、この1年間、どんな運用がされていくのか見守っていきます。

●竹の駅を試行(岸和田丘陵地区)しました

大阪府の南に位置するだんじりでも有名な岸和田市の丘陵地区でもここ数年、竹の活用に向けた研究・取組みを市・事業者(竹の子農家の方、地域の鉄工所、建材メーカー等)の方々と一緒に進めています。洲本市での活用につながった連続燃焼試験も実は、岸和田市での取組みがきっかけとなっています。これまで、効率的な竹の伐採・収集方法等の社会実験等も行い、コスト検証などを行ってきました。昨年度は、近隣のエリアからも竹を収集する仕組みとして、持ち込まれた竹を一定単価で買い取る「竹の

駅」を試行実施しました。悪天候ではありましたが、近隣の竹の子農家さんからは、放置するだけだった竹が買い取られるのであればということで、軽トラで往復しながら、運び込んでくださる方もいらっしゃいました。今年度、さらに、検証を進めていく予定です。

(なかがわ きみこ)

## 近 況

### 里山十帖にて新しい価値観の贅沢を味わう

一昨年、所員から一冊の本「里山を創生するデザイン的思考」を薦められた。

この本は、雑誌「自遊人」の編集長である岩佐十良氏が、新潟県南魚沼市で廃業した温泉旅館を再生させた奮闘記であり、再生の考え方を示したものである。

岩佐氏は、地元銀行や取引銀行から高いリスクがあるといわれながら、3億円超の投資をし、現在では稼働率90%以上の実績をあげ、成功させている。岩佐氏の再生事業にかけた思いについて、本の中では色々なことが述べられているが、特に次のような言葉が印象に残っている。

- ①本来のデザインとは問題解決や目標達成のプロセスやテクニックである。
- ②「デザイン的思考」とは、最初からデータを見ないこと、対象となる事象を体験してやることから始める。データは後でみる検証のためのものである。
- ③宿はライフスタイルを提案するメディアである。

また、本の中で「旅館料理とは違う、里山十帖だけの料理、山菜や野菜にひと手間、ふた手間かけて素材の味を引き出している」とのこと。

この本を読んだ他の所員も感銘を受け、いつか機会があれば、里山十帖に泊まってみたいと思っていた。

今年、弊社所員のゲストハウス研修の実習生のつながりから新潟県村上市で町並み保存に関わられた観光カリスマの吉川真嗣氏、この吉川氏が恩師と仰ぎ、30年以上をかけて杉林を里山に復活されている大原久治氏を取材できる機

会を得た。

そこで、所員2人と一緒に新潟研修の旅となり、「里山十帖」での泊まりを旅程に組み込んだ。

### ●古民家棟と宿泊棟からなる12室の宿

「里山十帖」は南魚沼市の市街地から車で10分ぐらい山道を登ったところの山裾にひっそりと佇んでいる。

高さ3m、横幅4mはあろうかと思われる木製の玄関ドアが開くと、天井には大きな梁が格子状に組み合わされ、ホールに置かれた直径1.5m、長さ2m超の切株のオブジェが、空間に緊張感を醸し出している。この切株の中には古民家棟内のバックミュージックを演出しているスピーカーが埋め込まれている。

まずは受付でウエルカムドリンクを注文し、早速ビールで喉を潤し、受付を済ませた。宿泊棟に行くと、雰囲気は一変、和を意識しながらもモダンなデザインとなっており、サインもスマートだ。

日本百名山の一つである巻機山（まきはたやま）を始め、2,000m級の山々が連なっている雪山を眺めながらの入浴は、本当に贅沢な気分になることができる。

入浴後、一番、楽しみにしていた山菜料理を味わいに古民家棟に移動した。

### ●工夫を凝らした山菜料理に感動

里山十帖の山菜料理は、著書に述べられていたように手をかけ、工夫された料理であった。

里山十帖では料理人と呼ばず、フード・クリエーターと言う。里山十帖のチーフ・フード・クリエーターは、国際基督大学出身で京都の有名料理店にて修業した異色の人だ。これまでの



里山十帖の古民家棟



玄関ホールにある切株のオブジェ  
この中にスピーカーが組み込まれている



食山菜の盛り合わせ、右上にあるのがヨモギ饅頭、  
中もヨモギの刻んだもの

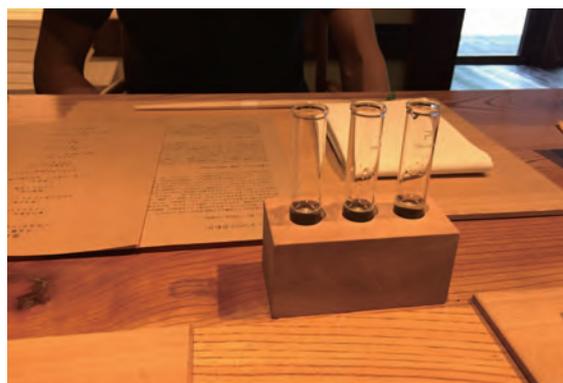
旅館料理ではない、新しい地産地消の料理スタイルを提供している。テーブルに着くなり、最初の演出には意表をつかされた。試験管のようなガラスケースに2～3cm注がれた液体が運ばれた。これはイタヤカエデの樹液という。

微かに木の香りがする。次に山菜の湯浸し4品、ふきのとうの豆腐和え、笹寿司に続き、山菜盛り合わせと続く。山菜盛り合わせは、どれも美味であったが、特にヨモギ饅頭は、中は餡子ではなく、微塵切にしたヨモギをオリーブ等で味付けしたのではないと思われるものが詰められていた。これは絶品であった。

これらの山菜は、従業員がこの時期になると毎朝、山に収穫に行き、ストックすること。

山菜料理といえば、お浸しと天ぷらが定番である。ここまでアレンジ、手間をかけて山菜料理を価値あるものに高めていることに感心、感動させてもらった。北国で山菜が収穫できる5月中旬に行けたのは幸運であった。

給仕をしてくれた女性も、こちらからの素朴かつ面倒な質問にも的確に答えてくれた。実際



食前酒ならず、食前水のイタヤカエデの樹液

#### 当日の山菜料理のメニュー

- ①「森の目覚め 命の水」  
イタヤカエデの樹液
- ②「野生の味」  
本日の山菜ティスティング 煎り酒
- ③「覚醒の時」  
ふきのとう豆腐
- ④「笹寿司」とう菜  
山菜浸し、塩引き鮭の飯鮓し
- ⑤「本日の山菜盛り合わせ」
- ⑥「在来種妙高そば」  
ソバの実リゾット
- ⑦「春の魚 鱒」  
桜鱒の糠衣焼 スイバのソース
- ⑧「春の山菜サラダ」
- ⑨「妻有ポーク」  
ギョウジャニンニクと酒すけのソース
- ⑩「ごちそうご飯」  
香の物、味噌汁
- ⑪「季節の甘味と薬草茶」

に、自分たちも同じものを食べて、食材の内容も理解し給仕をしているからこそ、答えられるのであろう。

#### ●翌日は初めてのマウンテンバイク体験

里山十帖では、アクティビティ体験が用意されている。事前に予約していたマウンテンバイクを体験した。翌朝6時半にヘルメットを被り、膝にサポーターを装着し、ボックスカーに乗って、30分ほど山を登っていく。出発地点から北国の風を受けながら、蛇行した山道をひたすら下っていく。途中で休憩を挟みながらインストラクターの佐藤さんが持参してくれたコーヒーを飲む。佐藤さんは、雑誌カメラマンからの転職であり、妻と子供を長岡市に残しての単身赴任だそう。

佐藤氏は里山十帖が借りている田んぼ（従業員や友達総出で米作りをしている）や巻機山の絶景ポイントまで案内してくれた。マウンテン

バイク体験は8,000円の料金であったが、このようにお客さんの興味あることへのサービスや里山十帖のことを色々と聞いたことは、値段以上の価値があったように思う。

「里山十帖」は、地産地消、里山の暮らしを発信するメディア媒体でもあり、新たな宿泊スタイルである。現在、岩佐氏には同じような廃業の旅館再生の相談が来ていると言われており、第2、第3の里山十帖が誕生するのも近いようだ。

(山田 龍雄)

### 大木町の食材を使った料理教室で、交流センターの意見交換

5月12日に九州芸文館で大木町産の食材を使った「輝ちゃんの新鮮野菜料理教室」を実施しました。今回の講座は、来年3月に大木町に開館予定の地域創業・交流支援センター(仮称)についての意見交換会も兼ねています。大木町には、特色である「農と食」を新たな切り口で、地元と都市住民をつなぎたいという思いがあります。料理教室はすでに事業候補に挙がっているのですが、まだ建物がないことから、まずは九州芸文館の人気講座を体験してみようということで、交流センターのスタッフになるプロジェクトマネージャーたちと一緒に企画しました。大木町の農と食に関わる方々を中心に呼びかけ、キノコ・ヒシ・アスパラ農家や加工品づくりをしている方、飲食店、酒屋などから20人近くが参加してくれました。

講師をしていただいた“輝ちゃん”こと貝田輝子さんはトマト農家であり、野菜ソムリエProでもあります。ほとんどの食材の生産者が知り合いで、前日または当日に仕入れたものばかりです。農家と野菜ソムリエProならではのこだわりを感じました。

レシピは、トマトのケーキサレ(甘くないパウンドケーキ)、大麦とトマトのチキン煮込み、アスパラちくわのペペロンチーノ炒め、高菜と豚ひき肉のスープ春雨、大麦粉のチヂミ、イチゴヨーグルトプリンなどの6品。そのうち仕込みが必要なチキン煮込みとプリンを除いた4品をつくりました。



料理の見本づくりをする貝田さん

はじめに貝田さんに料理の手本をみせていただいたのですが、笑いを散りばめながら、野菜の保存方法や美味しさの引き出し方などの話もあり、さすが人気講座の講師だと思いました。お手伝いスタッフが3人協力しており、料理教室のスムーズな進行には、こうした裏方の存在が欠かせないことも感じました。

料理は4つのグループに分かれて作ったのですが、料理に慣れている方が多く、手際よく作業が進みます。自宅にある調味料で、手軽に作れることをコンセプトとしているので、すぐに実践できるものばかりでした。アスパラちくわのペペロンチーノ炒めは、私も家でぜひつくってみたいと思う一品でした。にぎやかな雰囲気の中、おしゃべりしながら料理をつくるので、気がつけば、料理を食べる前から各班のメンバーと仲良くなり、料理が早くできた班から、さっそく名刺交換が行われていました。

昼食後は、交流センターについての意見交換です。私の班では、「農家も都市の人も一緒に語れる井戸端を再現したい」「産地ならではの野菜の使い方など学べる場にしたい」といった積極的な意見が出ました。でも、「気軽にいける、行きやすい雰囲気をつくらないといけない。目的がなくてもいける場所にしないと」ということで、「日替わりカフェ」など、地元の人たちで交代してやれば負担も少なく、ふらりと寄りたくなるのではという話が出ました。さらには、「しめ縄づくりや川祭りの飾りなどを学ぶ場があるといい」「フナ釣りだったり、ひばかしの作り方も学べる」「地元にある食を伝えないと、子どもたちに懐かしいという味の記憶が残らない」という地域文化の継承について



料理づくりを通じて交流が進みました

の話も出ていました。お年寄りが元気なうちに若い人たちにつながらないと間に合わないかもしれないという危機感も滲んでいました。他の班でも、似たような問題意識が共有されていました。交流センターの方向性は、市民感覚と当初内部で考えていたものはあまりずれていないことを確認できて、少しほっとしました。また参加者の中からは、日替わりカフェも週1日だったらできるかもしれないという意見や、プロジェクトマネージャーに加工品づくりやデザインも手伝ってほしいという話も出て、プロジェクトチームのお披露目と業務開拓にもつながる場になりました。積極的な方々が多く、今後も協力していただけそうで、大変心強く思いました。今後もこうした機会を多くつくり、開館前から交流センターのファンづくりを行っていただきたいと思います。(本田 正明)

### 表紙解説

このエリアで開発が盛んになりだした1995年と2015年の人口を較べてみると、古門戸町も須崎町も人口はかなり増えています。高齢化率は須崎町で若干上がっているものの、20%を切っているので、高齢化はほとんど進んでいない状況です。

驚いたのは、1世帯あたりの人数がどちらも1人台前半であり、単身世帯が非常に多くなっていることです。ワンルームマンションが多いことが統計からも伺えます。

このエリアは埋蔵文化財包蔵地となっており、1～2年ほどの調査期間が必要となり、調査も事業者負担となるため、ファミリー向けのマ

古門戸町と須崎町の人口比較（国勢調査より）

町名	年	人口	65歳以上	高齢化率	世帯数	1世帯人数
古門戸町	1995	597	137	22.9%	287	2.08
	2015	1,161	215	18.5%	835	1.39
須崎町	1995	870	150	17.2%	475	1.83
	2015	1,148	228	19.9%	925	1.24

ンションは事業性が厳しいそうです。数少ないファミリー向けマンションには、地元の居住者が多く、今でも入居待ちをしている人がいるくらいなのだそうです。山笠に参加したのが縁で、ここに移住したい、子育てをしたいという声もあるそうですが、物件がほとんどないのが実情だそうです。

一方で、都市部ゆえに住宅を相続する際の高額な相続税が払えず、土地や建物を手放さなければならぬ状況も生じています。ファミリーマンションを建ててほしいという地元の思いとは裏腹に、事業者がワンルームマンションの建設を申請してきても、法令を遵守していれば、断るすべが地域には存在しません。

民間ベースの経済性・効率性一辺倒の開発によって、顔の見えない隣人が増えていくことが果たして地域の活性化につながるのだろうかという疑問に思います。地域とのつきあいを生むような丁寧なまちづくりを都市計画や土地利用の制度にも組み込めないものだろうかという思いを強くしました。今後も都心居住のテーマを追いかけてみたいと思います。(本田 正明)

### よかネット No. 127 2017.7

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号  
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6205-3600

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋